

有事における僧侶の布施行

川上洋行

① 東日本大震災が起きた時の自身の行動

青森県光明寺の川上洋行です。青森県では震災の津波被害がございましたが、当時は岩手県、宮城県、福島県の被害が大きかったことから被災県の隣接県としての視点で発表をさせていただきました。

私はこの日、弘前市において会議があったので集合時間まで、弘前市内の喫茶店にて雑誌を読みながら暇をつぶしていた。

本を読みながらウトウトとしそうな時に、地震は起きた。三月九日にも大きめの地震があり、そんなに大きな揺れではないと思いのんきに周りを見渡してみると、停電の為か天井の電気は消え、非常灯が点き、客の悲鳴と共に店の外に出ている自分がいた。

まだ会計前であったが、店の人に一言告げて、車に戻り、ワンセグ放送のテレビを見ると驚愕の事実がそこに映し出されていた。大変大きな地震、広範囲な地震である事がわかり、急いで会計を済まし、会議を欠席し、自坊へと帰ることにした。

会長、その他役員に連絡を取ろうと思っても携帯電話は通じず、公衆電話ならと思い探し受話器をあげても音さえない、広範囲の停電になると何も使用できなくなるのだなと思いつながら田子町までの道のりを急いだ。

自坊ではもちろんのように停電していたが、水道、ガス（プロパンガス）は使用でき、暖を得るための反射式ストーブが何台もあったので生活にはさほど苦労はなかった。ただ、電気のない生活に慣れていない子ども達は不安な顔をしながらの生活であった。

さて一日から一四日までの間、車のワンセグ放送にて地震の規模、被害を確認し、自分の周りの生活は何とかなると思い、途切れ途切れの携帯電話であったが、情報を集め始めた。

その当時、青森県の青年会長が全日青の災害対策委員長だったこともあり、少しずつではあるが被害情報が入ってきていた。

だがその中で僧侶とは思えない情報も耳にすることがあった。俺たちの会が行くまで動くなよとかメンツを押し付け、都会の寺はどうかわかりませんが、田舎の寺では米・菓子などの備蓄は一般家庭より多めにあるのではないかと思っていたが、自分たちの生活もどうなるかわからないのに他の人たちの面倒まで見れないといった話があったようだ。

情報集めをしている中、誰かのブログで津波が来たあたりでは子ども達が餓死し始めているといった情報が見つかった。助かって欲しい、生き残って欲しい、命をつなげて欲しいと、今、自分のできる行動は何かと思ひ、少しずつではあるが食料、水、ガソリンを探し始めた。

まず、どこに持って行くかを考え、高速道路はストップしているので遠い所は無理であった。ガソリン満タンで往復できる所は青森県最南端の田子町からでは、岩手県しかないと思ひ、岩手県の西山文生上人（現在は改名され、西山是文上人）、梅澤宣周上人（当時岩手県日青会会長）と連絡を取り付け、被害状況を聞いた。津波被害のあった地域では各避難所に四〇〇人〜五〇〇人単位で避難している。しかし食料、水が不足しており、緊急に支援が必要だと聞いた。

貴重なガソリンを求め地元、県をまたぎ二戸市まで探しに行き、何度も並び、三日間で車一台分のガソリンを満タンと携行缶に五ℓ程のガソリンを調達し、残りは食料であった。

一日早朝、電気が復旧し、また停電しては困ると思い、すぐさま風呂の準備をし、家族六人急いで入浴した。入浴中に思い出されたのが、スーパーで並んでいる主婦達の会話で、電気が直ったら銭湯は混みそうだね（笑）と言っていたがその通りだと思った。

話を戻すと、一日、電気が復旧したのと同時に、日本人の主食である米を探した。地元は田舎のためスーパーにはたくさん米があったので、買い占めても良かったのだが、人の眼を気にして買う事ができなかった。

米を貯蔵していそうな所、方々に連絡を入れるも米は無いと断られ、ダメ元で知り合いの肥料店に行くと、「そんな事だったら何トンでも準備するよ、電気も復旧したから精米もできるしね」と快い返事をしてくれた、地域のコミユニティに感謝である。

久しぶりにパソコンの電源を入れ、道路状況を調べると、花巻市東和町より先の沿岸部には通行規制があり、花巻市東和町本妙寺まで行けるのが精一杯のようであった。ガソリンの残量、走行できる距離を調べ、入念に情報と物資の準備をし、一日の昼頃に岩手県チームが被災地に向かうとの事だったので、昼前には着けるよう積み荷をチェックし、乗車定員の重量を考え、米四〇〇キロ、水一〇〇キロ、調味料、菓子類その他を調達し一日昼過ぎには出発準備終了。しかし、一日深夜、西山上人より連絡があり、一時間前には、本妙寺に到着して欲しいとの連絡があり、一日に道中で購入予定だったオムツや粉ミルク、ほ乳瓶等の乳児用の物を諦め、七時に出発する。

花巻市東和町本妙寺に到着すると、砂子田上人、檀家の方が一名おり、トラックにて支援物資を運ぶ予定になっていた。被災地での物資搬送を手伝う心づもりの予定であったが、乗車定員を超えるため諦め、砂子田上人へ挨拶をし、帰宅に至る。

支援物資を輸送し、本妙寺住職砂子田上人、檀家さんの顔色を見ると自分の兄弟、親戚とも連絡が取れず、疲労感があるようだった。早く国や自治体が動き、被災者の空腹を癒し、暖かい物を届けられたらと思い、自分一人の力は無力であると考えさせられた一日であった。

② 有志の面々で炊き出しやボランティア活動に協力させていただいた

その後、静岡のある青年僧の篤い思いと行動によりボランティア団体との繋がりができ、避難所での炊き出しや泥かきからはじまり、東北青年僧の面々や有志の青年僧の皆々が各被災地に赴きそれぞれにお金を使い食料、衣服などの布施行、身体を使った布施行を行った。現地ではお金があっても使えるところがなく、物が無い、人の手が必要などころだらけであった。その活動が動き始めていた全日青を含め大きな広がりを見せて行った。

この頃、青年僧の中で僧侶が体を使ってボランティアをするべきではない、亡くなった方々への供養、復興に向けて祈りを各自坊にて各自行ったほうが良いなどの意見が出てきていた。

青年僧の皆々で瓦礫撤去作業、泥かきなどを行っているときに現地の方々から「あなたたちは普段何をやっている人なの？」と聞かれ、僧侶ですと答えたところ、仮埋葬場に親戚や親兄弟が眠っているから拝んでくれないかと言われ、参加者の皆で仮埋葬所を行道しながら自我傷を転読し供養を行った。この時は心から供養のお経とお題目を唱えた、参加した皆の気持ちが一体となったような気がした。それからは集まるたびに作業が終わってから仮埋葬場や海に向かって供養のお経を唱えることが当たり前になっていった。

このボランティア活動中に思ったことは、僧侶は一般社会における技術を何も持っていないし、少数の方々ですが何を勘違いしているのか被災地において被災している方々に不満を言ったり、特別扱いされなければ機嫌を損なう僧侶、現場に来てすぐに釘を踏んで足に怪我をし、何もすることなく帰って行った人、炊き出しに行っても包丁の使い

方すら知らない、泥かきに行ってもスコップの使い方を知らない、何も工夫しようもしない、僧侶とは人の気持ち、そして立場に寄り添い、なんでもそこそこ知っていたりできなければならぬのではないだろうか。何かが起こった時に少しでも行動できる訓練や勉強も行ったほうが良いのではないか、一般社会では何も役に立たないであろう。

そしてこのボランティア活動には多くの先輩から「あまり大っぴらにはできないけれどこれを青年会の支援活動と被災している方々になんか支援してあげて」と少しではない額を支援していただいたことも報告させていただきたい。何に使われるかわからない支援団体に寄付するよりは目に見える支援を行っていると協力をしたいとの事だった。青年僧は時間があってやる気があってもお金がないという立場を先輩僧が私たちの立場と気持ちを汲んでいただき協力、支援していただいたことをご報告させていただく。

③ 僧侶とは布施を受けるだけでいいのか

この当時、身体を使って布施行をしようとしている僧侶の足を止めようとする方々がいた。会のプライドを前面に押し出し、自分たちが行くまでお前らは動くな。または親心で言ってくれていると思うが、「現地に行った人が怪我をしたらどうする、誰が責任を取るのだ」と言う方々、有事の際にはそんなものが役に立つのだろうか、救いの手を求めている人たちにそんなもので命をつなぐことができるのであろうか。生きているからこそ、これから仏道修行を行うであろう人々を信仰の道へいざなう事ができるのではないだろうか。

僧侶は檀信徒に布施行をしなさいとよく言うが、私たち僧侶はどうだろう？身内の僧侶内では色々あるが、一般社会に向けての布施行は行っているのだろうか。

自坊の総代が頭のあるやつは頭を使って何かをすればいい、頭がないなら身体を使って何かをすればいいと言っていた。私たち僧侶もただお経を読むだけでなく僧侶としての矜持を持ちながら、お金を使うのか頭を使うのか身体を

使うのか、又はお寺を使うのかそれぞれの得意なことを使って何かしらの行動を起こし有事の時だけではなく普段から布施行をするべきではないかと思う。

思うことは誰でもできる、行動することは大変な労力が必要であるが、行動に移さなければただの妄想で終わってしまう。

④ いれからの僧侶とついでと世の中に出るべきではないか。

被災地に初期のころから入っていた方々に聞くと、震災初期のころは被災地に行っても見向きもされず、作務衣を着た状態でも誰からも声をかけられず、邪魔者扱いされたとのことである。衣を脱ぎ、作業着姿で作業している中で声をかけられたとのことである。僧侶としての袈裟、衣、プライドより、黙々と作業をしている後ろ姿があったからこそ話しかけられ、そこから他人との会話が始まり、初めて僧侶として認識され、人に望まれて拜んでほしい、供養してほしいとの言葉が出てきたのではないだろうか。

お寺は過去より寺子屋や地域コミュニティの中心であり、コンビニの数より多く、地域に根差し、人が集まりやすい環境であると思う。しかしながら一般社会においては、お寺の敷地に入っていないのか？お坊さんに会っても何を話していいかわからない、何をやって生活しているかわからないから仙人のような扱いをする人もいる。僧侶も袈裟衣を着けない状態で一般の社会に溶け込む、又は必要とされる行動をするべきではないだろうか。